

令和2年度「T-GAP」実践報告

「T-GAP」委員会 洪木陽介 岩井香奈 塚原康介 井上卓也
荒木竜平 神田雄司 渡會愛梨 藤井未也子

生徒自らが社会課題を設定し、その解決に向けてアクションを起こす、課題解決型の学習に取り組む学校が増えている。SGHに指定されて以来、本校では2年次においてグループで身近な社会における課題を発見し、解決学習に取り組む「T-GAP (Tsukusaka Global Action Programme)」という授業を開発してきた。本論は、令和2年度に行われた実践について報告する。

キーワード 課題解決型学習、社会課題、ソーシャル・アクション、総合的学習の時間

1. はじめに

1-1 「T-GAP」の位置付け

「T-GAP」は本校2年次の必修教科目で「つくさかグローバルアクションプログラム」の頭文字を取ってつけられたもので、本校がSGH認定校となり開発された授業の1つである。本校のキャリア教育・課題解決型学習の、基幹を担う授業である。一昨年度までは学校設定教科「国際科」(2単位)として開講されていたが、昨年度から教育課程の改編ともななって科目名はそのままに、教育課程上は「総合的学習の時間」として実施されている。

本校の特徴的なカリキュラム開発上の重点として、3年間を通じた全校的なキャリア教育の取り組みが挙げられる。1年次「産業社会と人間」(以下、「産社」)、2年次「T-GAP」、3年次「卒業研究」(以下、「卒研」)の一連の流れの中でキャリア形成に資する基礎的・汎用的能力(2011, 中央教育審議会)を総合的に育成することが目指されている。そして、そうした能力の中でも、近年では「課題対応能力」に注目が集まっている。

本校は「WWL(ワールド・ワイド・ラーニング)コンソシアム構築支援事業」の拠点校として、国内外フィールドワークを取り入れた体系的な探究型カリキュラムを開発する役目を担っており、今年度はその2年目である。その中で、育成する人物像として、SDGsの課題解決ができる人、広い視野と専門性を持つ人、新たな分野同士の融合によりイノベーションを起こすことができる人、世界の架け橋となることができる人を挙げている。WWL拠点校となる以前より実施している「国際フィールドワーク」や「高校生国際ESDシンポジウム」などの種々の取り組みや3年間を通じた「産社」から「T-GAP」、「卒研」までの流れは、全校的に行われる課題対応能力の育成の基幹となるも

のであり、WWLの構想の実現においても欠かすことができないものであり更なる発展が必要である。特に本年度2年次生(26期生)からは、1年次7月に新潟県阿賀町での国内フィールドワークを開発・実施し、1年次3月に実施している海外校外学習のフィールドを、カナダからASEANの3地域(インドネシア、タイ、シンガポール・マレーシア)に変更している(2020, 筑波大学附属坂戸高等学校)。ここでは、「産社」で地域(ローカル)と世界(グローバル)についての事前学習を行ったうえで実際に現地へ赴き、バックグラウンドの違う人たちと協働したり異なる文化や社会課題に触れたりするなどの経験をする。このように実際に1次情報に触れ確かめたりすることを通して、批判的に物事を考えることができる力の基礎、協働力の基礎を身に付け、「T-GAP」への効果的な接続を図っている。

2年次「T-GAP」は、生徒たちが社会課題を発見・設定し、高校生ができる解決策を考え、グループで協働してソーシャル・アクションを実行することに重きを置く。このような課題設定・情報収集・問題解決・まとめのサイクルを繰り返すことで、「卒業研究」への接続を担っている。

1-2 本年度までの「T-GAP」の運用とその成果と課題

前述のように「T-GAP」は、SGHを実施するにあたって開発されWWLの実施においても継続して実施していく科目の1つである。その蓄積の中で、申し送られてきた課題を順次挙げていく。

【令和元年度(25期生)】

- ①アクション実施までのスケジュールが過密であったこと
- ②(研究的な)リサーチスキルの指導不足
- ③ある程度教員の促しが必要な生徒も事業が立ち上げ

られたために、企画を推進しきれず負担感が大きかったであろうこと。

【平成30年度（24期生）】

- ①アクション実施までのスケジュールが過密であったこと
- ②（研究的な）リサーチスキルの指導不足
- ③教員が「ルール」を敷き過ぎることの弊害

前々年度の「T-GAP」では、実際にソーシャル・アクションに取り組むまでに、「アクションⅠ」「アクションⅡ」と二段構えでアクションを実施している。「アクションⅠ」では、活動の実施に必要な知識やスキルを習得することを目的として、自分らが設定した課題設定が妥当かどうか、当該社会課題を扱う外部団体を探しアドバイスを求める。「アクションⅡ」では、実際に自分たちの身近なところで課題解決のための行動を起こす。前年度の「T-GAP」でも、同様の運用をしている。こういったプロジェクト型学習の経験があまりない生徒らにとって、事前に専門家からアドバイス受けることは、適切な課題設定やソーシャル・アクションを実現するためには効果的な取り組みであろう。

今年度は、生徒がプロジェクト計画を立てる前に、興味・関心分野の多くの知識取得のための活動を行っている。また、プロジェクトの[目標]を立てる際には、[ビジョン(理想の状態)]が何なのか、設定した[目標]は本当に[ビジョン]に基づいているのかを意識するように展開している。この段階の生徒にとって、プロジェクト計画の作成・修正をすることは大変困難であるため、プロジェクト計画に必要な要素を明確にした。それにより、早い段階でのプロジェクト計画の作成・練り上げの実現を意識している。

1-3 本年度の基本計画

本年度の「T-GAP」の目的を次のように設定した。

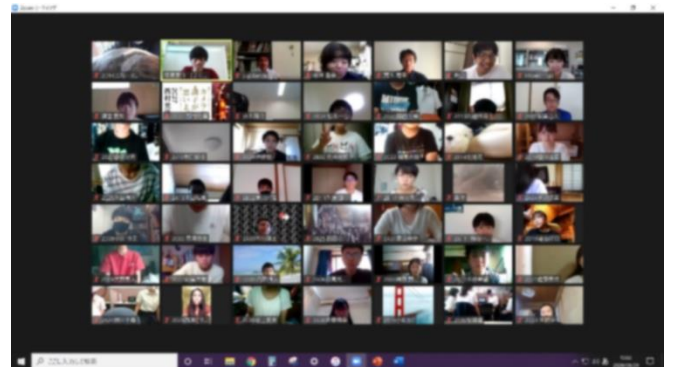
- [1] 自ら社会課題を設定し、解決のための方策を考え実行することができる。
- [2] 設定した社会課題の解決に向けて、グループで主体的・協働的に取り組むことができる。
- [3] アクションの過程・結果から、更なる課題を設定することができる。
- [4] 活動内容を適切な様式で表現することができる。
- [5] 設定した社会課題がグローバルな課題であることを理解することができる。

これらは、これまでの本校の目的を踏襲しつつ「総合的探究の時間」の学習指導要領のねらいを意識しており、今後の成果から本校の目的を常に修正していく必要があるものである。年間指導計画は【資料1】で示す。今年度は、コロナの影響で計画を変更したところもあるが、おおむね計画通り進めることができた。しかし、年明けの緊急事態宣言の発令に伴い、令和3年1月16日、1月30日、2月12日の授業が中止となり、年明けの授業は年間指導計画通りには実施できていない。本年度の運営体制を以下に示す。

- ・履修者数150名、担当教員8名。
- ・変則隔週土曜日の1~3限(2単位)で実施。
- ・1人の教員につき4~5グループ、計約20名の生徒を担当(統括教員は2グループ10名の生徒を担当)。
- ・8月まではオンラインのみ、9月からはオンラインと対面を併用しての実施。

2. 「T-GAP」の指導の実際

今年度のT-GAPは、コロナの影響でスタートが遅れ、初回の授業が4月20日となった。8月末までは完全オンライン(Zoomを利用)で授業を実施し、9月からはオンラインと対面を併用して授業を実施した(図1)。



(図1) オンライン授業の様子

初回授業の冒頭では、1年次に取り組んだ「産社」と3年次に取り組む「卒研」との比較をしながら、「T-GAP」に取り組む意義やソーシャル・アクション、1年間の流れなどを説明した。そして、先輩たちの「T-GAP」の取り組み例をいくつか紹介し、「T-GAP」のイメージが沸くようにしている。授業は、パワーポイント等の資料をZoomで共有しながら行っており、授業で用いた資料はチームズやクラッシーを活用してデータで配信している。本章では、初回授業からプロジェクトの計画・修正、アクションの実施、活動報告会、「T-GAP」最終報告書作成までの実際を報告する。

2-1 書評発表会とプロジェクトグループの決定(4~5月)

(1) 書評課題とその発表

探求学習では、自らの興味・関心から課題設定をすることが重要であるが、そのためには興味・関心分野の多くの知識や経験が必要である。本校では、1年次の3月に海外校外学習が設けており、そこで自分の興味のある地域やプログラムを選択し、異なる文化や社会課題の現状について実感を伴って知ることができる。例年は、4月最初の「T-GAP」の授業で海外校外学習の事後学習を行い、グローバル化が進む現代の国内外の社会課題についての知識を増やしたり理解を深めたりすることで「産社」から「T-GAP」へのスムーズな接続を図っている。しかし、26期生は新型コロナウイルス（以下、コロナ）感染拡大の影響で海外校外学習が中止となり、自分の興味のある分野や社会課題に対する国内外の知識・経験が不十分である。そこで、課題設定のために必要な知識を増やすために、自分の興味・関心がある分野の新書を読んでその書評を作成し、それを生徒同士で共有する発表会を実施した。その際、本校の4つの科目群を意識し、生徒の興味に合うような「おすすめの書籍一覧」と「書評フォーマット」、「書評作成例」を生徒に提示している（資料2、資料3）。書評発表会は、パワーポイントで発表内容をまとめ約10人1グループで実施しており、発表会を通して10人分の知識を得ることとなる。「発表者」「司会・進行」「質問者」を生徒が担い、全員が「発表者」と「質問者」を経験するようにした。

(2) プロジェクトグループの決定

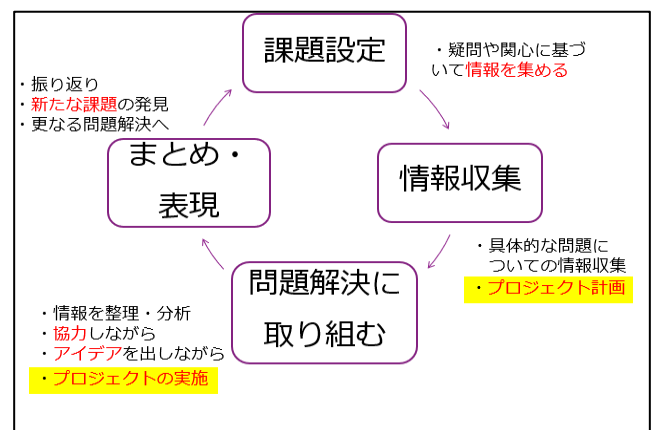
今年度は、オンライン環境であるため生徒同士が直接相談しながらグループ決定をすることができなかった。また、異なる考え方や価値観を持った生徒と協働し、それぞれのよさを生かしながら個人だけではつくりだすことのできない価値を生み出すことをねらいの1つとしているため、原則1グループ5人程度とし、1~2人グループが出ないようにしている。グループ決定の手順は、以下の通りである。

- [1] 生徒を約20人ずつの8つの大グループをつくる。
- [2] それぞれの大グループでプレゼンを行う。
- [3] プレゼンを受け、生徒同士話し合いながら、20人中で最終的な4~6人のプロジェクトグループを決定する。

[1] では、似たような興味・関心の生徒が集まるようにグループ分けをした。具体的には、生徒は自分の「興味ある分野」もしくは「T-GAPで取り組んでみたい分野」を選択肢の中から2つ（第1希望と第2希望）選択する。選択肢は、「①農業・環境・動植物」「②文化」「③情報、工業、ものづくり、コンピュータ」「④保育・教育」「⑤福祉関係」「⑥医療関係」「⑦国際・語学」「⑧マスコミ、音楽、イベント」「⑨旅行・観光・ブライダル」「⑩健康、スポーツ、栄養、調理」「⑪地域創生」を提示している。この結果から、1グループ約20名程度の8グループを作成し、各グループに担当教員をつけた。その際、グループの全員が「①農業・環境・動植物」選択者というような偏ったグループにならないようにしている。[2] では、「これまでの活動」「興味ある社会課題や身近な問題」「T-GAPでやってみたいこと」をテーマにし、各グループで全員がパワーポイントでプレゼンを行った。[3] では、[2]のプレゼンを聞いた後、生徒同士で話し合いながら一緒に活動してみたい仲間を見つけ、最終的なプロジェクトグループを決定した。全グループがMicrosoft Teams（以下、チームズ）でグループを作成し、授業時間外の活動はチームズやZoomを利用して行っている。そのチームズのグループには担当教員も入り生徒とのやりとりで活用している。プロジェクトグループを決定した後、メンバー同士の自己紹介や、「T-GAP」でやってみたいことを話し合った。授業で用いたワークシートは、データで生徒と共有し、生徒はそれを編集してチームズで担当教員に提出する形を取っている（資料4）。

2-2 プロジェクトの計画(6月~7月)

グループが決定した後の最初の授業では、まず、T-GAPでの探求の過程とその意義について説明した（図2）。これは、「探求における生徒の学習の姿」（文部科学省、2018、p.12参照）を参考にしている。



(図2) T-GAPでの探究の過程

そして、探求の過程を回すことを実現するために、「T-GAP」ではプロジェクト型学習を行うことを伝え、プロジェクトの過程について、先輩のプロジェクトを具体例として挙げながら説明した（図3）。



（図3）T-GAPで行うプロジェクトの過程と先輩のプロジェクト例

本稿でのプロジェクトの過程やそこで使われている用語、生徒らが作成するプロジェクト計画書のフォーマットなどについては、「大学1年生からのプロジェクト学習の始めかた」（常盤・西山，2019）を参考にしている。

（1）ソーシャル・アクションについて知る

生徒らがプロジェクトの計画をする前に、社会課題の解決のためにどのような取り組みがされているのかを知ることから始めた。当初は本校卒業生に来てもらい、彼らが行った「T-GAP」について講演してもらう予定であった。しかし、コロナ禍でその実現が難しくなったため、本校教員が、大学生のときに行ったソーシャル・アクションについての講演を行った。この講演では、社会課題と出会ったきっかけから始まり、その何について研究しようと思ったか、そして多くの知識を得たり一次情報に触れたりしていくうちに徐々に研究目的が具体的にになっていく過程が分かりやすく説明されていた。また、対象地域の状況に合った研究目的と方法、活動内容、結果が示されており、まさに「ビジョン」を意識しながら「目標」「達成要件」「タスク」が練り上げられていく過程を知ることができた。

（2）プロジェクト計画の作成

高校生が外部団体と協働してソーシャル・アクションを行おうとする際、自分たちのやりたいこと、つまり「目標」ばかりに目が行き、国や自治体、協働する外部団体の「ビ

ジョン」を疎かにしがちである。この視点が無ければ、社会的に意味の無いアクションを行う可能性があり、それはソーシャル・アクションとは言えない。高校生のときはとりあえずやりたいことをやらせればよいという声を聞くこともあるが、自身が社会の一員だということを理解し、社会のために何をすべきか、どのようにすべきかを考え取り組んだ活動を通して、自身の考えを深めることができる。生徒が「ビジョン」の重要性を実感するために、先輩の「T-GAP」の例や1年次のときに作成した阿賀町のポスターを活用した。例えば、1年次に作成したポスターでは、生徒らが調べたり体験したりして感じた阿賀町社会課題をあげ、それらを解決するための方法をまとめている。その中には、阿賀町の人口減少や少子高齢化を課題としてあげ、それを解決するための方法をいくつかまとめている。プロジェクトの過程でいえば、「目標」と「タスク」にあたる。しかし、これらのほとんどが阿賀町の「ビジョン」に基づいておらず、阿賀町が目指す将来の姿とは合致しないものも多々見られた。このようなことを、第2次阿賀町総合計画を参照しながら説明し、生徒らは阿賀町の「ビジョン」に基づいた「目標」を立てることの重要性を実感した。そして、プロジェクトの「ビジョン」と「目標」を設定するために、まずは、自分たちで作成したワークシート（資料4）の内容を参考にしながら「T-GAP」でやってみたいことについて情報収集を行い、現段階の「ビジョン」と「目標」を設定した。情報収集の仕方については、参考のためにいくつか提示している（資料5）。設定した「ビジョン」と「目標」は、情報収集をしたり実際に協働する団体が決まりアクションを行ったりするうちに随時修正されていくものであり、これは生徒にも意識させるようにしている。また、「目標」が適切に設定されているかどうかのチェック項目として、「①ビジョンに基づいている」「②いまだに達成されていない」「③具体的である」「④実現可能である」「⑤プロジェクトメンバー全員が意欲を持って取り組める」の5点を提示している。

「ビジョン」と「目標」を設定した後は、何がどうなったら「目標」を達成したと言えるのかを明確にした「達成要件」と、それを満たすためにやらなければならないことの「タスク」を設定する。ここでは、設定した「ビジョン」と「目標」に対して、既に似たような課題に対して活動をしている他の自治体や団体が無いか先行研究を調べながら「達成要件」と「タスク」を考え、さらにこの過程で「ビジョン」と「目標」も修正されていった。これらはプロジェクト計画書にまとめており、計画書の修正が行われたら

どうして修正したのかの理由も記載し、練り上げの過程が分かるようすべてのデータを保存するようにしている(資料6)。ここまでの活動では、T-GAPでの探究の過程における「課題設定」と「情報収集」を繰り返しており、教員だけでなく生徒自身もこのことを理解して学習を進めることが重要である。

(3) 協力団体の決定とプロジェクト計画の見直し

情報収集を十分にやりプロジェクト計画作成したら、早い段階で外部団体と繋がりアドバイスをいただいたり協働してソーシャル・アクションを実施する。例年であれば、外部団体に電話でアポイントメントを取り、直接訪問をしてアドバイスをいただいたり協働の了承をいただいたりしているが、今年度はコロナ禍であることを考慮して、原則電話やZoomを用いての活動とした。生徒は、外部団体の方に自分たちがテーマとした社会課題について、事前に作成しているプロジェクト計画書をもとに、その課題に取り組みたいと思った背景などを盛り込んで意見交換を行った。そして、いただいた意見やアドバイスをもとに、プロジェクト計画の見直しを行っている。アクションを協働していただける外部団体が決まった後は、その団体が既に取り組んでいる活動や現状を知ったり経験したりすることで、より具体的な課題を見だし[ビジョン]の修正が行われ、それに伴って「目標」「達成要件」「タスク」も修正されていき、協働を続けることでそれらが練り上げられていく。このような活動を通して、社会と自分の理想との隔たりを認識することができ、社会や自分にとって一層価値のある課題を見だし、よりよいソーシャル・アクションに取り組むことをねらいとしている。ここでの活動は、T-GAPでの探究の過程における「問題解決に取り組む」と「まとめ・表現」にあたり、さらに新たな「課題の設定」と「情報収集」へ進んでいる。なお、生徒への電話指導については、生徒へ配布した資料を参照していただきたい(資料7)。

この段階の生徒は、自分らで外部団体にインタビューや協働の依頼をした経験がほとんど無い。そのため、いきなり生徒が外部団体に連絡をすることはしっかり指導をしたとしてもトラブルが起きる恐れがある。そのため、生徒が連絡を取る前に、教員が外部団体に事前にインタビューやアクションの協力のお願いの連絡を取っている。その際、協力をさせていただけるかどうかは生徒の話を聞いて考えていただき、難しいようであれば断っていただいて構わない旨を伝えている。なお、生徒の主体性を伸長するため、

教員が協力団体先に連絡していることは生徒へは伝えていない。今年度はコロナ禍での活動であったため、協力団体を見つけることが例年より困難であったが、生徒らは根気強く色んな外部団体にアプローチをし、いい経験になったと思われる。インタビューやアクションの協力をいただいた団体には、生徒の連絡の後にも、再度教員からお礼の連絡を入れている。来年度以降も協力団体を見つけることが難しいことが想定されるため、今回協力いただいた外部団体とは引き続き良好な関係を続けることが大事である。

昨年度は、この段階を「アクションⅠ」、実際のソーシャル・アクションを「アクションⅡ」と位置づけ、「アクションⅠ」の実施前に校内で「アクションⅠ」の計画発表会を開き、生徒同士で互いの計画にアドバイスをし合う機会を設けている。今年度はオンラインで進捗が遅かったため、情報収集や教員との面談などのプロジェクト計画の作成に時間を多く割き、校内でのプロジェクト計画発表会は実施していない。

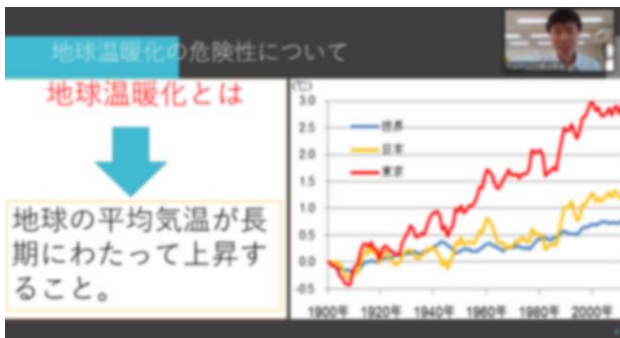
2-3 アクションとまとめ(8月~11月)

(1) アクションの実施

今年度は7月までに外部団体と繋がり、早い段階で外部の意見を取り入れプロジェクト計画をみなおし、夏休み中にアクションを実施することを目標とした。協力団体の都合もあるため夏休み中の実施が難しいグループが多かったが、最終的にはほとんどのグループがアクションを実施することができた。今年度は、コロナ禍でも可能なアクション、コロナ禍だからこそできるアクションをテーマに「T-GAP」を進めてきた。以下に、今年度の特徴的なアクションをいくつか紹介する。

①完全オンラインで実施したアクション：グループ [Spread the bio battery]

このグループは、今後も持続的に地球で暮らしていくうえで、もっと多くの人たちがエネルギー問題やその解決策である発電方法について知っていくべきではないかと考え、再生可能エネルギーの重要性や詳細についてより多くの人に広めることを目的として活動を行った。具体的には、中学生を対象とした授業をオンラインで実施し、アンケート結果から参加者の理解度やさらなる改善点を見つけた(図4)。



(図4) Zoom でワークショップを実施している様子

このグループの他にも、コロナの影響で休校となり学習への好奇心の低下がみられる小学小学生を対象に、自分から興味を持ち学ぶ楽しさを知ってもらうことを目的にした活動を行ったグループなど、オンラインでのアクションを実施したグループは複数あった。

②コロナ流行による社会課題に着目したアクション：グループ [Save the animal from COVIT-19]

このグループは、コロナ禍による飼育動物への影響と、コロナ禍で動物が心身ともに健康に暮らすことができる条件を明らかにすることに興味を持ち活動を行った。そのために、関東圏の複数の動物園を訪れ環境エンリッチメントに関する取り組みについて取材を行った。そして、取材した内容をまとめたポスターを作成し、各動物園と本校に掲示して情報発信を行った (図5)。



(図5) コロナの影響で設置された消毒液 (上) と環境エンリッチメントに関する取り組み (下)

コロナ流行による社会課題に着目したグループはこのグループ以外にも、コロナ禍で学校給食が無くなり廃棄作物が増加していることに着目し、子供たちが食品ロスについて考える機会を設けることを目的としたグループなどもあった。

③遠距離の協力団体と役割を分けて協働したアクション：グループ [NEW GATA]

このグループは、1年次に3泊の校外学習で訪れた新潟県阿賀町の地域創生に興味を持ち、今年度、阿賀町校外学習へ行くことができなかった1年次生を対象として、1年次生が交流人口から関係人口に移行する人数を増やすことを目的としてワークショップを実施した。この活動では、新潟大学創生学部の澤邊准教授と研究室の学生のみなさんと協働し、それぞれの役割を明確にしてアクションを行った。具体的には、生徒がワークショップに関するアイデアを出し、新潟大学の方々にはその実現のための協力をしていただいた。新潟大学の方々には現地を訪れてもらい、関連企業・団体や役所の方々からビデオメッセージをもらったり特産物を集めて本校まで送ってもらったりした (図6)。

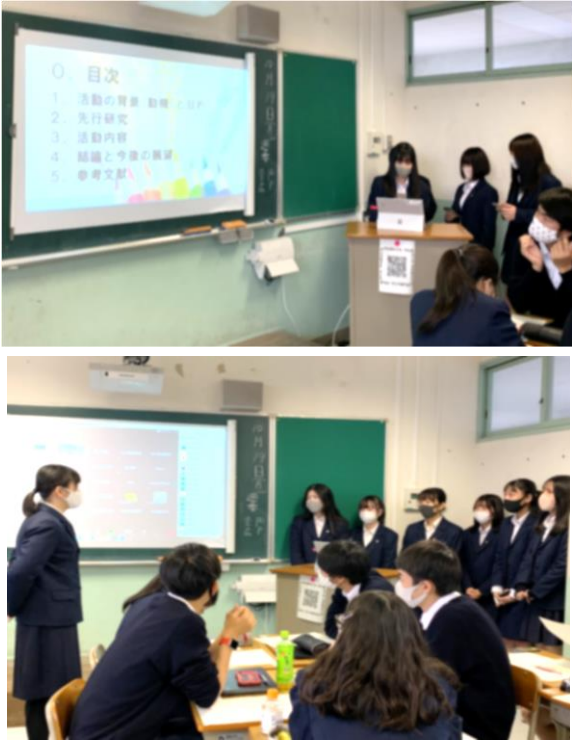


(図6) 現地からのビデオレター (上) と特産物を活用したワークショップの様子 (下)

(2) 「T-GAP 報告会」

ここまでの活動成果の報告会 (以下、「T-GAP 報告会」)

を、10月17日（土）9:00～13:00に実施した。今年度の「T-GAP 報告会」では、生徒は登校し、全33グループを4会場に分けパワーポイントで発表した。全ての会場でZoomを繋げており、保護者やその他関係者が自宅等からZoomで参観できるようにしている。スケジュールは、まず全体会会場のミーティングルームで開会式を行い、その後、各会場のミーティングルームで発表、最後に再度全体会会場のミーティングルームで振り返り、講評、閉会式を行った。発表時間10分、質疑応答5分で行い、必ず質疑応答が行われるような仕組みにしている（図7）。



（図7）発表の様子（上）と質疑応答の様子（下）

「T-GAP 報告会」までにアクションを終えていないグループは、これまでの活動とアクションの構想（協力団体との協働の経過など）を発表している。参観者の中には、仕事の合間の短時間だけ参観していただいた方や、来校が困難な遠方から参観していただいた方もおり、オンラインだからこそ多くの方に生徒の活動を知っていただくことができた。一方で、オンラインでのみの開催は、参観者からの質問が出づらいというデメリットもあった。今後は、来校しての参観とZoom等を用いてのオンラインでの参観を並行して行うことも考えられる。

（3）「T-GAP 最終報告書」

「T-GAP」の活動報告を、各々が「T-GAP 最終報告書」としてまとめている。「T-GAP 最終報告書」は、3年次で

取り組む「卒業研究」を見据えて論文としての体裁を重要視している。フォーマット等の生徒への指示に関しては、昨年度の25期担任団が整えていたものを引継ぎ、今年度用に多少修正を加えて行っている（資料8）。

3. グローバルな取り組み（10月～11月）

3-1 グローバルミーティング

本来であれば、1年次3月の海外校外学習でASEAN諸国の社会課題等の1次情報に触れ、そこでの経験や身に付けた批判的思考力の基礎、協働力の基礎を活かして「T-GAP」への効果的な接続を図り、さらに、「T-GAP」での活動とASEAN諸国で実感した社会課題などを比較することで、グローバルな視点で自分たちの活動を捉えることができる活動を予定していた。しかし、コロナの影響で海外校外学習が中止となったため、上記の活動の補完が必要となった。補完として、海外で社会課題に取り組んでいる専門家の方を講師とし、Zoomでのグローバルミーティングを計画・実施した。講師の手配は、株式会社JTB川越支店に依頼した。依頼の際には「SDGsアクションプラン2020～2030年の目標達成に向けた「行動の10年」の始まり～」（2019, SDGs推進本部）に示されている、政府によるSDGsを推進するための主な取り組み一覧から、今年度の「T-GAP」グループのプロジェクトと関連のある取り組みをピックアップし、それらに関連する活動をされている講師を探していただいた（資料9）。最終的に、以下の9名の講師を手配することができ、生徒らはグループで話し合っ好きなグローバルミーティングに参加した（表1）。

（表1）開催されたグローバルミーティング
（講師の滞在国名とミーティングテーマのみ記載）

国名	ミーティングテーマ
フィリピン	青少年就労機会創出 貧困解決 教育
カンボジア	ファッションブランド 農村部女性の就労
カンボジア	有機農業 フェアトレード 多文化理解 途上国事業(起業)
オランダ	コンサルティング 市場調査 農業効率化 施設栽培
ドイツ	市民の気候変動対策 脱プラススーパーマーケット 地産地消
ドイツ	持続可能な都市開発 環境配慮のホテル 再生可能エネルギー

オーストラリア	動物園飼育員コロナ対応 野生動物治療 動物保護
ニュージーランド	教育 ジェンダー ダイバーシティ 人権 環境 社会

グローバルミーティングでは、講師が行っている取り組みや滞在国の現状、日本との違い、生徒の活動に対するコメント、質疑応答などを行った。生徒は、グローバルミーティングを通して国外の社会課題の現状や、社会課題に対する日本との捉え方の違いなどを知ることができた。しかし、授業時間数の関係上、ねらいとしていた自分たちの活動とグローバルミーティングでの内容を比較する時間をじっくり取ることができなかった。また、意図と少し違ったようなミーティングになってしまったところもあったため、もっと早い段階から講師と打ち合わせを重ね、こちらが期待しているミーティングの内容を明確に共有する必要があった。

4. その他の発表の機会

「T-GAP」の発表の機会としては、全員が発表する校内の「T-GAP 報告会」の後にも複数用意した。その中には、全員が応募可能なものと、校内で代表グループを選んで参加するものがある。外部での発表の際には、「T-GAP 報告会」と全く同じ内容にするのではなく、引き続き継続している活動についての内容を加えたり、活動の振り返りをさらにブラッシュアップしたり、違った視点からの発表にするように指導している。その発表に対して第三者（専門家や他校の生徒）からの評価をいただくことによって、T-GAP の探究の過程を再び回し始め、探究を深めることができる。また、他の発表者（他校の生徒）とのディスカッションの時間を設けている場合も多いため、生徒らはいいい刺激をもらうとともに、卒研への意欲の向上にもつながっているようである。以下に、今年度参加した発表の機会についてまとめる。なお、今年度はすべての発表でオンライン開催となっている。

(1) 全員が応募可能な外部発表

①マイプロジェクトアワード2020

全国高校生マイプロジェクト実行委員会が主催している「マイプロジェクトアワード2020」は、全員が応募可能な外部発表の機会であり、昨年度の25期生から参加ははじめそれを引き継いだ形である。ここでは、まずは書類審査があり、それに通れば地域 Summit に招待され、そこでさ

らに好成績を残せば全国 Summit へ招待される。事前に学校の代表者がマイプロジェクトの「パートナー登録」を行っていただければ、学校から1グループは学校推薦として地域 Summit へ参加することができるため、外部発表の機会が欲しい場合は忘れずに登録しておきたい。今年度は、8団体が応募して5団体が地域 Summit へ進んでおり、学校推薦の1グループを合わせて6グループが発表する予定である。

(2) 学校で代表グループを選考する外部発表

以下の発表の機会では、「T-GAP 報告会」での内容をもとに、教員が代表グループを選考している。多くの発表の機会があるため、多くのグループが発表できるようできるだけ代表グループが被らないようにしている。

①第9回高校生国際ESDシンポジウム

本シンポジウムは、全国のWWL事業拠点校・共同実施校・連携校、SGH指定校、SDGs関連団体などを対象として、毎年本校が主催しているものである。2年次からは、シンポジウムの趣旨に合う活動を行った5グループを選出し、活動成果について発表している。

②SDGs×高校ユースミーティング

本ミーティングは、主に全国のWWL事業拠点校・連携校を対象として、愛媛大学附属高等学校が主催しているものである。目的は、現在行っているSDGsに関する取り組みを他校の生徒とともにブラッシュアップすることで、今後も継続した活動ができるような未投資を立てることである。ここでは、全員が異なる学校の生徒と4名程度のチームを組み、チームごとに角取り組みに対して今後の課題や改善策を協議し、最後は全体で協議内容を共有している。本校からは、SDGsの目標との関わりが深く、それについてのアクションをしっかり行うことができている農業系の1グループを選出している。

③第3回全国高校生SRサミット～FOCUS～

本サミットは、国際貢献や地域貢献活動を行っている生徒を対象として、立命館宇治中学校・高等学校が主催しているものである。目的は、各校の実践を共有し生徒が主体となって知恵を混ぜ合うことである。ここでは、自分らのプロジェクトに他校の生徒が混ざったり、逆に他校のプロジェクトに混ざったりして各グループでプロジェクトを練り直し、最終発表を行っている。さらに、最終発表に対

して専門家によるフィードバックもいただくことができ、プロジェクトを多角的に見直す機会となっている。元々は8月開催予定であったため、「T-GAP」ではアクション前のプロジェクトを練り上げる段階のグループの参加が想定される。今年度はコロナの影響で11月開催と日程変更がされており、その時点ではほとんどのグループがアクションを終えていたため、「T-GAP」での活動を来年度も引き続き自主的に続けていきたいという1グループを選出している。

④SSH/SGH/WWL 課題研究発表会

本発表会は、SSH/SGH 認定校や WWL 事業拠点校・連携校などを対象として、東京学芸大学が主催しているものである。目的は、SSH/SGH/WWL 課題研究の成果を発表し、意見交換を行うことで互いに知見を深めることである。また、大学教員や専門家からの評価を得る機会もあり、各自の課題研究を進展させることができる。今年度は、口頭発表1名、ポスター発表6グループを選出している。

(3) 生徒が見つめてきた外部発表

①ディスカバワード2020

本コンテストは、「探究」や「アクション」を取り組んできた中高生のグループまたは個人を対象として、桜美林大学が主催しているものである。まだ2年目の開催で規模が大きくないため、アットホームな雰囲気の中での発表である。これは、生徒自ら探してきて、参加を希望した外部発表の機会である。ここまで発表に対して積極的なグループが出てくることは想定外であり、今後は自分で発表の場を見つけてきて良いことを全体でアナウンスしてもよいだろう。

5. おわりに

以下に、本年度の成果をまとめる。

- ①コロナ禍で活動に制限があったが、生徒同士で Zoom や チームズなどを活用し、主体的にグループの仲間や外部団体と協働することができた。
- ②最後のアクションまで実現することができなかったグループもあったが、外部団体とのインタビューやいただいたアドバイスから、作成したプロジェクト計画の練り上げを行うことができた。
- ③探究の過程とプロジェクトの過程を明確に分け、プロジェクトの過程の要素を切り分け明確にすることで、プロジェクト計画書作成が比較的スムーズに進み、外部団体

とのすり合わせからアクションまでのスケジュールを短縮できた。

- ④外部発表の機会を増やし、自ら進んで外部発表をするような環境づくりができた。

対面での授業やグループ活動ができない期間が長かったが、比較的工夫しながらグループ活動ができるよう促すことができた。むしろ、放課後に縛られず夜や休日など自分らの都合が良い時間に集まって活動をしたり、パワーポイントなどの資料をクラウド上で同時に編集したり、普段の環境ではあまり見られないようなオンラインの利点を活かした様子が見られた。プロジェクトの計画から外部団体との交渉、アクションの実施まで、完全または一部オンラインで実現したり、遠方の団体と直接会うことなくそれぞれの役割を明確にしながら協働したり、探究の新しい形のモデルとなるようなグループがあった。アクションを実現することができなかったグループに対しては、「T-GAP」はアクションをすることが目的ではなく探究の過程を経験することが重要ということを意識できるようにする必要がある。このまとめはまだできていないが、授業の要所で探究の過程やプロジェクトの過程を提示し生徒らの活動の説明をしていたため、上記の目的が達成されることを期待している。プロジェクトの過程の要素を明確にしてプロジェクト計画書のフォーマットを作成したことで、生徒だけでなく教員にとっても、今の計画に何が足りていないのか、どこの部分が不十分なのかを明確に分かるようになった。さらに、過去の計画書のデータを残すことで、どの部分がどういった理由で練り上げられていったかの振り返りができるようになった。

続いて、以下に本年度の課題をまとめる。

- ①学校外での活動について許可できるものと許可できないものを明確に示すことができなかった。
- ②オンラインでのグループ活動では、リーダーや特定の生徒先導型になることが多々見られた。
- ③「T-GAP 報告書」などのレポート作成スキルの指導が不十分。
- ④統括の教員は、担当グループを持たず統括に専念した方がよい。
- ⑤生徒の活動費用が全て自己負担でいいのか。

コロナ禍で三密を割ける等の制限が多い中での授業で会ったが、生徒から外部での活動希望が出た場合どういった活動が許可できるのかといった基準が、最後まで示すことができなかった。その都度管理職に確認したり、教員が生徒に伝える内容も度々変わったりしてしまい、生徒教員

ともに負担になった。学校として、ある程度明確な基準を設定する必要がある。グループ活動では特定の生徒が積極的に発言したりグループを引っ張って行ったりすることはよく見られることが、オンライン環境下ではそれが顕著に表れた。今まで話したことの無い同級生と同じグループになることもあるため、いきなり対面でなく話すことに抵抗があったようである。お互いの壁をできるだけ無くすために、アイスブレイクの時間を多く取る等の工夫があれば、該当生徒らのその後のグループ活動も比較的スムーズにいったかもしれない。レポートの作成の説明は丁寧に実施することができたが、レポート作成の途中での指導することはできなかった。統括教員が担当グループ、教員員に完全に任せる形となってしまった。現在の生徒の活動費用は全て自己負担であるが、授業で行っている活動であるため学校で負担できるところが無いのか検討する必要がある。また、活動費用が自己負担であるがゆえに、希望の外部団体との協働は諦め近場での活動に済ませるなどの制限も現れた。

前年度の課題である、「アクション実施までのスケジュールが過密であったこと」に関しては、プロジェクトの要素を明確にして生徒が意識することで、比較的スムーズなプロジェクト計画の作成や練り上げが実現できたと思われる。しかし、夏休みにアクションを行うことを目標とした場合、スケジュールが過密になってしまうことは避けられない。プロジェクト計画の作成に時間をかけすぎることやを割け、ある程度の段階で完成とし、早い段階で外部団体と繋がりアドバイスをいただくことで、プロジェクトを軌道に乗せる等の工夫が必要である。

現在、実施予定でまだ行えていないものとして、「T-GAP最終報告書」の自己評価と修正、「T-GAP」に関するアンケート調査がある。これらは、1月の緊急事態宣言発令に伴い、実施が延期されている。これらについては、別で報告する。

【参考・引用文献】

- 中央教育審議会 (2011). 「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について (答申)」. 文部科学省.
- 井庭崇・梶原文生 (2016). 『プロジェクト・デザイン・パターン』. 翔泳社.
- 文部科学省 (2018). 『高等学校学習指導要領解説—総合的な探究の時間編—』. 学校図書.
- 常盤拓司・西山敏樹 (2019). 『大学1年生からのプロ

ジェクト学習の始めかた』. 慶應義塾大学出版.

- 筑波大学附属坂戸高等学校 (2019). 『筑波大学附属坂戸高等学校研究紀要』, 第56集. 筑波大学附属坂戸高等学校研究部.
- 筑波大学附属坂戸高等学校 (2020). 『筑波大学附属坂戸高等学校研究紀要』, 第57集. 筑波大学附属坂戸高等学校研究部.

【資料1】令和2年度 T-GAP 年間指導計画

回	月日	時間数	単元	内容	備考
1	4月27日	3	T-GAPの前に	活動の流れ、書評課題	オンライン
2	5月16日	3	T-GAPガイダンス	コロナ禍とSDGsのベック 書評の相互発表	オンライン
3	5月30日	3	GAPグループ分け	自己紹介とグループ分け	オンライン
4	6月13日	3	GAPグループ活動①	プロジェクトについて アクション計画の作成	オンライン
5	6月27日	3	GAPグループ活動②	アクション計画の作成	オンライン
6	7月11日	3	GAPグループ活動③	アクション先へのインタビュー準備	オンライン
7	7/28-30	3	GAP強化期間	アクション計画の修正	オンライン
夏期休業(GAP活動を実践する)					
	8月29日	3	GAP報告準備	GAP発表会のガイダンス	オンライン
9	9月12日	3		GAP発表会の準備	海外ミーティング期間 9月中旬～10月(課外給)
10	9月26日	3		GAP発表会の準備	
11	10月17日	3	GAP発表会	GAP発表	保護者参観有 国際情報高校との合同
12	10月31日	3		代表GPIによるGAP発表	ESDシンポジウム参加(代表グループ発表)
13	11月7日	3	GAP最終報告書	レポートの書き方	
14	11月21日	3		レポート作成	11月中旬立命館宇治高校で1グループ発表
15	12月5日	3	卒業研究に向けて	プレ本研ゼミ②	
16	12月19日	3		プレ本研ゼミ③	
冬期休業(宿題:卒業研究構築)					
17	1月16日	3	卒業研究に向けて	プレ本研ゼミ④ 講義発表に向けて	マイプロAward地域サミット1月～2月(代表グループ)
18	1月30日	3		プレ本研ゼミ⑤ 講義発表会	
19	2月8日	3		研究大会に向けて	研究大会準備
20	2月12日		研究大会 構築発表会		研究大会・保護者
21	3月学年末後		未年度のメンター教員への構築発表		マイプロAward全国サミット3月

【T-GAPのための準備課題】

興味のある分野の**新書**を読もう

—専門知識を増やす—

T-GAPでは、自分の興味がある分野について探求していきます。探求活動を実現するには、その分野の膨大な知識が必要です。学校が始まると、活動だけでなく書籍や論文、専門家へのインタビューなどで知識を増やしていくこととなります。その準備として、まずは下にあげる**新書**の中から興味あるものを読んでみましょう。

※下に無い本でも自分で探して読んでもいいですよ（ただし新書に限る）。

※書店に無いものも多いので、早めにamazonや楽天ブックス等の通販サイトで注文しておきましょう。

【今後の流れ】

○新書を読み課題提出（1冊分の知識をGET!）→提出した課題を発表して共有（複数冊分の知識をGET!）

- ・提出日：5月6日（水）
- ・作成方法：配信されたフォーマット（Word）に直接入力
- ・提出方法：クラッシーの該当箇所に **PDF** に変換して添付

おすすめの書籍一覧

【社会課題】

番号	書籍名	著者	出版社等
①	縮小ニッポンの衝撃	NHK スペシャル取材班	講談社現代新書
→人口減少という日本の社会課題に興味がある人にお勧め。読みやすい。			
②	死の淵を見た男 吉田昌郎と福島第一原発	門田 隆将	角川文庫
→福島第一原発の事故に遭遇した現場の人たちの話。読みやすい。			
③	子どもの貧困—日本の不公平を考える	阿部 彩	岩波新書
④	子どもの貧困II—解決策を考える	阿部 彩	岩波新書
→子供の貧困についてアクションするなら、一読した方が良い一冊。			
⑤	「社会を変える」を仕事にする：社会起業家という生き方	駒崎 弘樹	ちくま文庫
→社会課題を解決するためにアクションしている人の話。病児保育がテーマ			
⑥	裸でも生きる—25歳女性起業家の号泣戦記	山口 絵理子	講談社 BIZ
→社会課題を解決するためにアクションしている人の話。途上国支援がテーマ。			
⑦	地球温暖化は解決できるのか—パリ協定から未来へ!	小西 雅子	岩波ジュニア新書
⑧	プラスチック汚染とは何か	枝廣 淳子	岩波ブックレット
→地球規模の環境問題についてわかりやすく解説している。			

⑨	国をつくるという仕事	西水 美恵子	
→伝記風の一冊。途上国支援や国際機関に興味のある人にお勧め。			

【環境・農業関係】

⑩	新版 農業がわかると社会のしくみが見えてくる 高校生からの食と農の経済学入門	生源寺眞一	
→食料自給率低下の原因を食生活と農業の構造変化よりわかりやすく理解できる。			
⑪	里山資本主義 日本経済は「安心の原理」で動く	藻谷 浩介	
→ノスタルジックな思いだけでは農林業は維持できない！国の基盤となる一次産業の可能性と重要性を理解できる。			
⑫	農学が世界を救う！食料・生命・環境をめぐる科学の 挑戦	生源寺眞一 ほか	岩波ジュニア新書
→農学は大変広い分野です。様々なアプローチで食料問題、環境問題の解決をするのが農学。耕すだけではないぞ！			
⑬	世界農業遺産－注目される日本の里地里山－	武内和彦	祥伝社新書
→伝統的な農業は文化的な価値も高い。日本の小規模農業の国際的な価値を見出してみよう。			

【文化と地域】

⑭	モバイルミュージアム 行動する博物館－21 世紀の 文化経済論－	西野嘉章	平凡社新書
⑮	文化立国論-日本のソフトパワーの底力-	青柳正規	筑摩書房
⑯	博物館と地方再生 －市民・自治体・企業・地域との連携－	金山喜昭	同成社
⑰	地域を活かす遺跡と博物館－遺跡博物館のいま－	青木豊, 鷹野光行	同成社
⑱	生きている文化遺産と観光 －住民によるリビングヘリテージの継承－	藤木庸介	学芸出版社
⑲	四国遍路 －八八ヶ所巡礼の歴史と文化－	森正人	中公新書
→貧困・病気・差別に苦しめられた四国巡礼が、今や観光の側面も大きくなり世界遺産登録の流れも出てきている。その他、独特な文化のある四国遍路が、どのような社会的背景で変容してきたのかを史実から紐解く。			

【情報・工業関係】

⑳	高校生からはじめる－プログラミング－	吉村総一郎	KADOKAWA
→プログラミング技術, Web の背景, 開発の仕方。			
㉑	痛快! コンピュータ学	坂村 健	集英社文庫
→日本のコンピュータの父。20 年以上前に書かれた本にも関わらず、普遍的なコンピュータの基本がわかる。			
㉒	FACTFULNESS(ファクトフルネス) 10 の思い込みを乗り越え、データを基に世界を正しく見る習慣		
→社会課題を正しく見るために必要な考え方。			
㉓	the four GAFA 四騎士が創り変えた世界		
→最新でかつ ICT に関しての世界の状況が書かれている			
㉔	ハウ・トゥー－バカバカしくて役に立たない暮らしの科学－	ランドール マンロー	早川書房

【資料3】書評フォーマット

2020 T-GAP 課題 新書を読んで書評を書こう

組 番 名前

著者		
書名		
出版社	出版年月日	ページ数
キーワード（5～8個）※興味のある分野に関係するものが好ましい		
<p>[1] 概要（300字以内） 選んだ本（著者）の問題意識や問い、本のポイント（<u>これがどういった本なのか</u>）を書こう。 ※「はじめに」に書かれていることが多いです。</p>		
<p>[2] あらすじ（要点、要旨などを自分の言葉で紹介すること） ※①この本を読んでいない人でも簡潔に内容が分かるようにする。 ②<u>すべての章（内容）</u>を理解して紹介する。</p>		
<p>[3] 個人的注目ポイント！ ①気になった章（内容）を取り上げ、どのように気になったのかを書こう。 ②T-GAPや卒業研究に活かせるような章（内容）を取り上げ、自分なりに調べてさらに深める。 また、どのように活かせるかを書こう。</p>		

【資料4】授業で用いたワークシートの例

第2回 T-GAP 5月30日(土)	
メンバー 2A01 筑坂太郎 2A 筑坂花子	
担当教員 渡木陽介 先生	
〈単元〉 「T-GAPのグループを決めよう！」	
目標	①T-GAP グループを作る。
◆本時の学習内容	
<ul style="list-style-type: none"> ・発表会を通して、T-GAPのアイデアを知るとともにグループを作る。 ・メンバーについて知る。 ・グループの活動内容を考える。 	
○メンバーのことを知ろう (是非、連絡先を交換してください)	
[メンバーの相互理解のためのフォーマット例] (グループ毎に編集してください)	
クラス・番号・名前	2A23 筑坂太郎
呼び名・あだ名	つくくん
得意なこと	意見をまとめて文章にすること
苦手なこと	おもしろい意見を出すこと
T-GAP で個人的に 目指していること	今まで、私は~~~~~・・・
クラス・番号・名前	
呼び名・あだ名	
得意なこと	
苦手なこと	
T-GAP で個人的に 目指していること	
○グループの活動内容を考えよう	
(活動内容を決めるための手順例)	
①漠然としたものでいいから、とりあえずやってみたいこと興味あることをたくさん共有する。	
②出たもののなかから、話し合っグループ全員が考えをすり合わせながら絞っていく。	
③とりあえず第2, 3希望くらいまで決める。(後日、改めて見ると考えが変わる可能性があるため、まだ1つには絞らない)	
<u>活動内容①</u>	
<u>この活動にした理由</u>	
<u>活動内容②</u>	
<u>この活動にした理由</u>	

情報収集の仕方



1. 興味あることのキーワードをもとに検索。

- ・信頼のおける情報（国・自治体・論文など）のみ。
- ☞二次情報（人から聞いた話やインターネットのブログ・まとめなど）は誰かの解釈でありことが多く、偏った視点・情報である恐れがある。



2. 先行研究・事例を調べる。

- ・同じような疑問や課題を抱いて、既に活動している人がいるはず。
- ・成功事例だけでなく、失敗事例もよく見る。そこから学ぶことも多い。
- ☞他の人が行っていることを知ることで、より自分らしさが反映された企画になっていく。

情報収集の仕方

3. 買ってみる, 体験してみる。 ※コロナ注意

- ・サービスの受け手が実際に感じる気持ち, 問題をつかむ。
- ・この経験を何度も繰り返すことが理想。
- ☞ユーザーの視点に立つことで, 初めて見えてくることがある。



4. 直に仕入れる。(一次情報) ※コロナ注意

- ・現場に繰り返し足を運んで, 生の情報(現場周辺の環境や雰囲気)を得る。
- ・その地域の人と顔なじみになるなどして, 自分しか得られない情報を得る。
- ☞自分だけの一次情報を得ることで, 独自性のある企画にできる。

プロジェクト名

協力団体 ※とりあえず、候補をあげよう（複数可）。学校の先生に聞きに行こう！

ビジョン

目標 ※「プロジェクト計画の参考資料」を参照する。

目標を修正した理由

達成要件 ※達成できたか、第三者でも判断できるもの（具体的なもの）にする。

達成要件を修正した理由

プロジェクトメンバー（リーダー◎）

タスク

大項目	担当者	期限	タスクの達成要件	達成状況

インタビュー先（協力団体先）への電話

【マナー】

○電話をかける時間帯と場所に注意

- ・昼食時間や就業時間外、始業時間直後、就業時間間際は避ける。
※TEL先の休日をしっかりと調べる。オンライン授業の合間に電話するのが現実的。
- ・静かな場所からかける。

○受け答えに十分気を付ける

- ・丁寧な言葉遣いを心掛ける。
- ・受け答えは、ゆっくり、はっきり、明るい声で。

○伝えるべきことをあらかじめメモでまとめておく（箇条書きにしておくもよい）

- ・伝え忘れの無いようにする（再度かけなおすことの無いよう）。
- ・相手からの情報を記録するため、メモの準備をして電話をする。



【電話の流れの例】

①学校と名前を名乗る

- ・まずは自分の所属と名前を名乗ることは常識。
※電話の相手が変わったら、その都度名乗る。

②電話をした目的を簡潔に伝え、担当者につないでもらう

- ・現在取り組んでいる探究活動について簡潔に述べ、担当者につないでもらう（最初は簡潔に！）。
- ・相手のご都合を聞く。

例)

「突然恐れ入ります。わたくし、筑波大学附属坂戸高校の2年次の〇〇と申します。
現在、私たちは5人1グループで献血者数の推移（探究テーマや「ビジョン」）に興味をもち探究活動をはじめたところで、10代の献血者率を増やす活動（やってみたい「目標」）のようなことを実現できないかと話し合っております。そこで、日本赤十字社様（TEL先）に献血者率を増やす活動（やってみたい「目標」）についてお話をお聞きしたくお電話させていただきました。
つきましては、10分程度でかまいませんので、担当者様のご都合がよろしいお時間にご相談させていただきませんか。」

③本題

- ・具体的な活動について伝える（「ビジョン」と「目標」）。
- ・インタビュー（情報収集だけ）だけの場合、お時間をいただいたお礼をていねいにする。
- ・活動の協力まで依頼する場合は、玉砕覚悟で頑張れ。

- ・協力を快諾していただいた場合、今後どのように進めていくのか（Zoomで打ち合わせか、直接伺っての打ち合わせか）、次回の打ち合わせはいつにするのかを決めましょう。

例)

「突然恐れ入ります。わたくし、筑波大学附属坂戸高校の2年次の〇〇と申します。

現在、私たちは5人1グループで〇〇（探究テーマや「ビジョン」）に興味をもち探究活動をはじめたところで、□□（やってみたい「目標」）のようなことを実現できないかと話し合っております。しかし、私たちだけでは、なかなか活動を実現させること、そもそもどのような活動であったら実現できそうなのかの判断すら大変難しいと感じております。そこで、△△様（TEL 先）にご相談させていただいたりご意見をいただいたりしながら、一緒にプロジェクトを企画し、実現をさせていただきませんかでしょうか。

ぶしつけなお願いで大変恐縮ではございますが、ご検討のほどお願いいたします。

・・・・・・・・（いろいろなやり取りがあつて）・・・・・・・・

本日は、お忙しいところお時間をいただきありがとうございました。」

- ※「課題設定の背景」「してみたい活動内容（「目標」）」を伝え、思い切って、一緒に活動してもらえないか依頼する。その際、自分らが計画している活動を100%実現させるというより、相談をさせてもらいながら実現できそうな活動を作り上げることができたらという旨も伝えるといいだろう。
- もし、協力が難しいと断られたら、お時間をいただいたことへのお礼をしっかりとする。

T-GAP 個人課題等のデータ提出についての指示書

1. 個人レポート課題について

① 体裁

A 4用紙3枚以上、5枚以下。字数は、要旨と本文で 5000 字以上。用紙の枚数と字数ともに、参考文献・謝辞・付録は含めない。余白 25mm、MS 明朝体、10.5 ポイント（字数と行数は 40 字×40 行が目安。写真や図表は 2～3 つまで。）

② 書き出し

1 行目：「T-GAP 個人報告書」※左揃え

2 行目：タイトル（自分でつける）※中央揃え

3 行目：年組番氏名 ※右揃え

4 行目から本文に入る

③ 本文の構成

1. 課題設定

（1）課題と設定理由…どのような課題に、なぜ取り組もうと考えたか

2. 文献調査…本、論文、統計などで調べたこと

3. 活動内容

（1）活動の目的と方法… 課題にどう関わるか（目的）

目的を達成するために考えたアクションは何か（方法）

（2）アクション I について…① 活動内容（目標・対象・日時・場所・具体的な内容）

② アクション I で明らかになったこと

（3）アクション II について…① 活動内容 ② アクション II で明らかになったこと

（4）成果と課題…各アクションを通してどのような成果が得られた／得られなかったか（目標が達成できたか）を述べ、その原因を分析する

4. 考察…取り組んだ課題について何を考えたか（新たに気づいた点、考えが変わった点）、さらに行うならどんなアクションが可能か

5. T-GAP に取り組んで

活動の達成に向けて自身はどのように取り組んだか、関心や意欲、強みや弱み、困難な状況において取った行動、成長した点や改善すべき点があれば、理由とともに記す

<参考引用文献>

※ アクション I と II で活動内容が変わった人は、1 と 2（1）はアクション II のもの、2（2）で変更した理由を述べる。

④ 提出期限

12 月 18 日（金）中に Teams 上のフォルダ（メンターの先生）に Word ファイルを提出。のちに、T-GAP の活動に関して Classi 上にアンケートも配信されるので、そちらにも回答すること。

⑤ 評価項目

(a)体裁を守っている。

(b)構成を守っている。

(c)参考文献の表記・引用の仕方が適切である。

(d)本・web の文章と自分の文章を区別していることが読み取れる。

(e)問題意識、アクションの目的、内容、考察までが一貫している。

(f)アクションを通して学んだことを考察の根拠として使い、考察に説得力がある。

(g)アクションへの自身の取り組みについて理由とともに十分にふりかえりがなされている。



政府によるSDGsを推進するための主な取組一覧

<p>①あらゆる人々が活躍する社会・ジェンダー平等の実現</p> <ul style="list-style-type: none"> 働き方改革の着実な実施 ジェンダーの主流化・女性の活躍推進 ダイバーシティ・パリアフリーの推進 子供の貧困対策 次世代の教育振興 次世代のSDGs推進プラットフォーム スポーツSDGsの推進 ビジネスと人権に関する我が国の行動計画 消費者等に関する対応 若者・子供、女性、障がい者に対する国際協力 	<p>②健康・長寿の達成</p> <ul style="list-style-type: none"> データヘルス改革の推進 健康経営の推進 医療拠点の輸出を通じた新興国の医療への貢献 感染症対策等医療の研究開発 ユニバーサルヘルス・カバレッジ推進のための国際協力 アジア・アフリカにおける取組（アフリカ開発会議（TICAD）を通じたものを含む） 	<p>③成長市場の創出、地域活性化、科学技術イノベーション</p> <ul style="list-style-type: none"> 情報通信技術・研究開発強化、人材育成 未来志向の社会づくり（「Connected Industries」・「Construction」推進等） STI for SDGsや、途上国のSTI・産業化に関する国際協力 地方創生や未来志向の社会づくりを支える基盤・技術・制度等 地方創生SDGsの推進 持続可能な観光の推進 農山漁村の活性化、地方等の人材育成 農林水産業・食品産業のイノベーションやスマート農林水産業の推進、成長産業化 	<p>④持続可能で強靱な国土と質の高いインフラの整備</p> <ul style="list-style-type: none"> 持続可能で強靱なまちづくり（「コンパクト＋ネットワーク」推進） 戦略的な社会資本の整備 文化資源の保護・活用と国際協力 レジリエント防災・減災の構築、災害リスクガバナンスの強化、エネルギーインフラの強靱化、食料供給の安定化 質の高いインフラの推進 環境インフラの国際展開 	<p>⑤省・再生可能エネルギー、防災・気候変動対策、循環型社会</p> <ul style="list-style-type: none"> 再エネ・新エネの導入促進 徹底した省エネ・新エネの推進 エネルギー科学技術に関する研究開発の推進 気候変動対策・適応推進、災害リスク体制強化 循環型社会の構築（東京オリンピック・パラリンピックに向けた持続可能性等） 国際展開・国際協力 食品廃棄物の削減や活用 農業における環境保護 持続可能な消費の推進 	<p>⑥生物多様性、森林、海洋等の環境の保全</p> <ul style="list-style-type: none"> 持続可能な農林水産業の推進や林業の成長産業化 世界の持続可能な森林経営の推進 地域循環共生圏の構築 生物多様性保護の国際協力 大気保全・化学物質規制対策 海洋・水産資源の持続的利用、国際的な資源管理、水産業・漁村の多面的機能の維持・促進 海洋ごみ対策（含む海洋プラスチックごみ）の推進 地球観測衛星を活用した課題解決 北極域の研究 	<p>⑦平和と安全・安心社会の実現</p> <ul style="list-style-type: none"> 子どもの安全（性被害、虐待、事故、人権問題等への対応、児童労働の撤廃） 女性に対する暴力根絶 再犯防止対策・法務の充実 公益通報者保護制度の整備・運用 法の支配の促進に関する国際協力 平和のための能力構築に向けた国際協力を通じた積極的平和主義 人道・開発・平和の切れ目のない支援 中東和平への貢献 アフリカの平和と安定に向けた新たなアプローチ
---	---	---	--	--	---	--

○補足（以下のものに対する活動を、海外で行われている方がいたら理想）

- [1] 外国人の人権尊重や生活の支援、宗教に対する理解
- [2] 教育の支援、生活の安定、保護者に対する就労・経済支援
- [3] ICT人材教育、STEM教育、プログラミング教育
- [4] コロナ禍での教育現場、単純に発展途上国の教育に関すること
- [5] 食・栄養に関すること
- [6] 地方の魅力発信、過疎対策、地元産業を担う人材育成

- [7] 再生可能エネルギー、新エネルギー、原子力
- [8] 食品ロス削減、食品廃棄物の3R、食品リサイクル
- [9] エシカル消費（自然環境を損なわない、児童労働・労働搾取）
- [その他] 動物に関する活動（動物園、動物愛護など）

（資料9） 講師依頼の際に提示した資料の一部（赤字と下部補足は筆者加筆）